

# フサイン朝チュニジアにおける フサイン2世ベイの統治期（1824-35年） ——フランス軍のアルジェ侵攻とチュニジアの経済危機——

桃 井 治 郎

**要旨** 19世紀初頭のフサイン朝チュニジアは、1830年のフランス軍によるアルジェ侵攻とチュニジアの経済危機によって困難の時代を迎えていた。

1824年に即位したフサイン2世ベイは、フランス軍のアルジェ侵攻に対して、フランスからアルジェを支援しないように求められる。そのため、ベイは、アルジェとフランスの仲介のために来訪したオスマン帝国特使のチュニス上陸を拒否した。また、フランスのクローゼル将軍からの提案により、アルジェリア西部のオランに出兵し、フサイン朝による統治を目指したが、現地民の反発で計画は挫折し、撤退を余儀なくされる。その後、フサイン2世ベイは、オスマン帝国のスルタンに対して一連の行動を弁明するために特使を派遣する。特使は、オランへの出兵はフランスとの衝突を避け、イスラーム教徒の血が流れることを避けるための行動であったと説明し、理解を得て帰国した。

一方、19世紀初頭からフサイン朝の宮廷にはヨーロッパからの奢侈品が流入し、ヨーロッパ商人への支払いが急増していた。その出費を支えていたのが、チュニジアで生産されるオリーブ油取引からの利益であった。しかし、1828年以降、オリーブは深刻な不作に見舞われる。契約量のオリーブ油をフランス商人に引き渡せなかったため、ベイはフランス総領事レセップスを通して交渉を行い、自ら個人資産を拠出するなどしてフランス商人への返金にあたった。フランス軍のアルジェ侵攻直後の1830年8月には、フランスに求められるままに、フランス商人のチュニジア内での活動を自由化するなどの内容の条約を締結する。

1824-35年のフサイン2世ベイの統治期は、フランス軍のアルジェ侵攻とチュニジアの経済危機を契機として、チュニジアにおけるフランスの政治的・経済的影響力が強まっていく大きな転換期であったといえよう。

キーワード：19世紀、チュニジア、フランス

## The Reign of Hussain II Bey in Tunisia (1824-35): The French Invasion of Algiers and Tunisia's Economic Crisis

MOMOI Jiro

**Abstract** In the early 19th century, Tunisia, which was under the Husainid

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

dynasty, went through a difficult period due to an economic crisis and the invasion of Algiers by French troops in 1830.

Hussain II Bey, who ascended the throne in 1824, was asked by France not to support Algiers during the French invasion. For this reason, he refused the Ottoman envoy, with a mission to mediate between Algiers and France to land in Tunis. In addition, at the suggestion of French General Clauzel, the Bey sent troops to Oran in western Algeria and aimed to rule Oran through the Husainid dynasty. However, the plan was failed due to the opposition of the local people, and the troops were forced to retreat. Hussain II Bey then dispatched a special envoy to the Sultan of the Ottoman Empire to justify his actions. Specifically, the envoy explained that the troops had been dispatched to Oran to avoid conflict with France and prevent spilling of Muslim blood, and they returned home with this in mind.

Meanwhile, from the beginning of the 19th century, luxury goods from Europe were flowing into the court of the Husainid dynasty, and payments to European merchants increased rapidly. This expenditure was supported by the profits from the olive oil trade in Tunisia. However, since 1828, the olive crop suffered serious damages. When Tunisia was unable to deliver the contracted amount of olive oil to French merchants, the Bey negotiated with French Consul General Lesseps, and returned the money to the merchants by contributing from his own personal assets. Immediately after the French invasion of Algiers in August 1830, the Bey signed a treaty that liberalized the activities of French merchants in Tunisia, as required by France.

The reign of Hussein II Bey (1824-35) was a major turning point at which France's political and economic influence in Tunisia increased in the wake of the French invasion of Algiers and the economic crisis in Tunisia.

**Key words:** 19th century, Tunisia, France

## はじめに

19世紀初頭のアフサン朝チュニジアは、国際環境の変化の中で大きな転換期を迎えていた。すでに18世紀末のフランス軍のエジプト遠征によってオスマン帝国の支配体制は揺らぎ始めていたが、19世紀初頭にはチュニジアに対してもヨーロッパからの直接的な圧力が強まっていく。

ナポレオン戦争後のウィーン体制の下、イギリスやフランス、ロシアなどの列強諸国は1818年のアーヘン会議で北アフリカ海賊の廃絶を決議する。翌年、イギリスとフランスの連合艦隊は、その要求を伝えるため、アルジェやチュニス、トリポリに來航した。それは、外交交渉というよりも、圧倒的な軍事力を

背景とした最後通牒ともいえる通告であった。ヨーロッパと北アフリカの軍事的格差はいまや明白となっていた。

外交関係の変化に加えてチュニジアの経済状況も大きく変化した。19世紀初頭には、ヨーロッパ商人を通じて高級衣料品や馬具、宝石などの奢侈品がフサイン朝の宮廷に流入し、その支払いをめぐって深刻な経済危機に陥るのである。

なお、フサイン朝チュニジアは、総督職のベイの地位をフサイン家が世襲し、オスマン帝国本国からは自立して統治が行われていた。本稿で取り上げるフサイン2世ベイの統治期は、チュニジアが外交的・経済的危機に直面した1824年から1835年までの約11年間である。1830年にはフランス軍によるアルジェ侵攻も起きている。

本稿では、フサイン2世ベイの書記官を務めたイブン・アビ・ディアフによる史料も用いてフサイン2世ベイの統治期をたどっていく。なお、同史料は、チュニジアの内在的な視点からこの時期のチュニジア史について記述した貴重な記録である。

それでは、19世紀初頭の国際環境の変化の中で、フサイン2世ベイがチュニジア内外の危機にいかに対応したのか、特にフランス軍のアルジェ侵攻に対してどのような立場を取り、また、チュニジアの経済危機にどのように対処したのか見ていこう。

## 1. 19世紀初頭のフサイン朝チュニジア

ここではまず、19世紀初頭に至るフサイン朝の歩みについて確認する。

北アフリカのチュニジア地域は、16世紀のオスマン帝国とスペイン帝国の地中海における覇権争いの舞台の一つであった。1534年、オスマン帝国北アフリカ総督のハイルッディーンがハフス朝チュニジアの内紛に乗じてチュニスを支配下に置くと、スペインがその争いに介入し、翌年、スペイン王兼神聖ローマ皇帝のカール5世が大艦隊を率いてチュニスを征服する。カール5世はハフス朝の君主ハサンを復位させるが、その支配は長くは続かず、1574年、シナン・パシャ率いるオスマン帝国軍が再びチュニスを征服し、以後、チュニジア地域はオスマン帝国の属領となった<sup>1)</sup>。

チュニジアにはイエニチェリ兵4000人が駐屯し、オスマン帝国本国から派遣されたパシャが統治を行ったが、徐々に現地の軍指揮官のデイや行政官のベイに実権が移っていく<sup>2)</sup>。1705年には、ギリシア出身の騎兵将校で、アルジェとの紛争で活躍したフサイン・イブン・アリ（フサイン1世）がチュニジアの実権を握り、以後、フサイン家がベイの地位を世襲してチュニジアを統治して

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

いく<sup>3)</sup>。いわゆるフサイン朝の時代である。

こうして、チュニジアはオスマン帝国の属領であると同時に、フサイン家が統治する独立的なベイ領となり、二重の政治的性格を持つことになった。オスマン帝国のスルタンを政治的・宗教的権威者と認める一方で、オスマン帝国による政治的・軍事的介入を回避し、チュニジアの独立を守る事がフサイン朝の大きな課題となったのである。

ヨーロッパとの関係では、1538年のプレヴェサの海戦や1571年のレパントの海戦で争ったスペインなどとの敵対関係は継続したが、オスマン帝国がフランスやイギリス、オランダに対して恩恵的通商特権であるカピチュレーションを認めると、17世紀にはチュニジアも三か国に対してそれぞれ和平条約を締結し、友好・通商関係を深めていく。さらに、18世紀には、スペインを含めて他のヨーロッパ諸国とも条約を締結し、チュニジアによる海賊行為はヨーロッパ諸国からの貢納と引き換えに沈静化し、チュニジアとヨーロッパの関係は安定化していく<sup>4)</sup>。

こうした状況に大きな変化が現れたのが19世紀初頭である。ナポレオン戦争後のウィーン体制の下、イギリスやフランス、ロシアなどヨーロッパの大国が

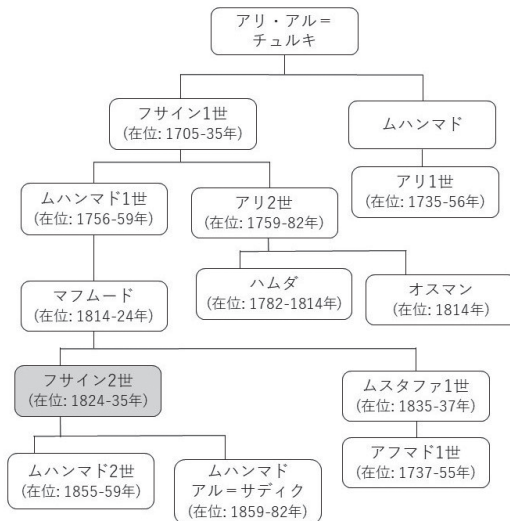


図1：フサイン朝系図

(フサイン1世ベイからムハンマド・アル=サディク・ベイまで)

北アフリカの海賊問題で協調し、人道的および通商上の理由から海賊の廃絶決議を行うのである。1819年には、英仏艦隊がチュニスに來航し、軍事的な圧力の下で海賊の廃絶を要求する。これ以後、チュニアの海賊行為は終焉した<sup>5)</sup>。

この出来事は、単に海賊行為の終焉という問題にとどまらず、チュニアとヨーロッパの関係に根本的な変化が生じたことを示していた。ヨーロッパとの軍事的格差は明白となり、以後、ヨーロッパからの圧力の下でチュニアの生き残りが模索されるのである。1798-99年のフランス軍によるエジプト遠征や1821-29年のギリシア独立戦争、1830年に始まるフランス軍のアルジェリア侵攻によって、チュニアの危機意識は高まっていったといえよう。

さらに、ヨーロッパからの圧力は軍事面のみならず、経済面においても現れた。19世紀初頭からチュニアの宮廷にはヨーロッパ商人を介して高級衣類品や馬具、宝石などの奢侈品が流入し、本稿が扱うフサイン2世ベイの統治期(1824-35年)には、チュニア経済は危機的状況に陥り、その対応が求められていくのである。

このように、19世紀初頭のフサイン2世ベイの統治期は、ヨーロッパからの軍事的圧力の下、フランス軍によるアルジェ侵攻やチュニアの経済危機などの諸問題が持ち上がり、フサイン朝にとって大きな困難な時代に直面するのである。

## 2. イブン・アビ・ディアフの歴史記述

ここで、19世紀のチュニア史についての記録を残したアハマド・イブン・アビ・ディアフについて確認しておこう。

1802年または1803年にチュニスで生まれたアラブ人家系のイブン・アビ・ディアフは、1827年に父親と同じくフサイン朝の宮廷の書記官となった。フサイン朝の宮廷は、従来はトルコ系で占められていたが、18世紀後半から現地のアラブ人にも門戸が開かれていた<sup>6)</sup>。本稿で見るとおり、イブン・アビ・ディアフは、フサイン2世ベイの下でオスマン帝国本国への使者を務めるなど若くして有能さが認められ、その後も1860年代まで歴代のベイの下で書記官を務めた。

イブン・アビ・ディアフが1862年から執筆を始めたのが、『チュニアの君主と主要協約の歴史 (*Ithaf ahl al-zaman bi-ahbar muluk Tunis wa 'ahd al-aman*)』である。同書は3部構成で、政体の比較分析とアラブ人によるチュニア征服からアリ2世ベイの統治期(1759-82年)までを扱った序論部<sup>7)</sup>、1782年から1873年までのチュニア史を扱った本論部、重要人物について記した結論部から構成されている。本論部分は、第1章がハムダ・ベイ(1782-1814年)、第2章がオスマン・ベイ(1814年)、第3章がマフムード・ベイ(1814-24年)、第4章がフ

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

サイン2世ベイ（1824-35年）、第5章がムスタファ1世ベイ（1835-37年）、第6章がアフマド1世ベイ（1837-55年）、第7章がムハンマド2世ベイ（1855-59年）、第8章がムハンマド・アル＝サディク・ベイ（1859-82年）の統治期についての記述である。第8章は、イブン・アビ・ディアフが亡くなる前年の1873年まで記述されている<sup>8)</sup>。なお、第4章と第5章は、フランス人史家アンドレ・レイモンによって仏訳されており、本稿はそれを用いる<sup>9)</sup>。

イブン・アビ・ディアフの記述は、宮廷の書記官として実際に見聞きしたことに基づき、一次資料としての価値も有している。人物評など主観的な意見を書き加えることはあるが、不確かな情報は、「～という話はあるが、神のみぞ真実を知る」というように歴史叙述の客観性も意識されている。もちろん、他の史料との比較検証は必要であるが、19世紀のチュニジア史をチュニジア側の視点から記録した貴重な資料であることは確かである。

それでは、イブン・アビ・ディアフの歴史記述も参照しながら、フサイン2世ベイの統治期についてその歩みをたどっていこう。

### 3. フサイン2世ベイの即位

フサイン2世ベイは、1784年3月11日にフサイン家のマフムードの長子として生まれる。1824年3月29日、父マフムード・ベイ（在位：1814-24年）の逝去に伴い、30歳でベイに即位した。実弟のムスタファ（後のムスタファ・ベイ）との結束は非常に強かったという<sup>10)</sup>。

同年末、軍人のアリ・ビン・ムスタファがアリ1世ベイの子孫を名乗り、チュニジア北西部のベジャで蜂起する。翌年1月、フサイン2世ベイは、弟ムスタファを指揮官として軍を派遣した。反乱軍は鎮圧され、反乱に加担した住民には賠償金が課されたという。同年10月、ムスタファはチュニスに帰還した<sup>11)</sup>。なお、フサイン家は、父マフムードの時代にムハンマド1世ベイの家系とアリ2世ベイの家系で家督をめぐる争いが生じたが<sup>12)</sup>、その後アリ2世ベイの血統は途絶え、フサイン2世ベイの時代以後、家督をめぐる内紛は沈静化した。

1825年3月25日、スルタンからの即位信任の勅令を託されたイスタンブール駐在大使がチュニスに帰着し、宮殿で即位の式典が開かれた。チュニスの町では3日間に渡って礼砲が鳴り響いたという<sup>13)</sup>。なお、同年、フランスでは復古王政のシャルル10世の戴冠式が行われたが、同式典にはベイも招待され、代理としてフランス駐在大使が出席したという<sup>14)</sup>。

フサイン2世ベイの統治期には、すでにチュニジアの経済危機が進んでいた。ベイは即位後まもなく、銀貨の銀含有率を減らし、銅含有率を増やす改鑄を指

示した。この変更について、イブン・アビ・ディアフは、宮廷の出費が収入を越えていたことが原因であったと指摘している。ベイをはじめフサイン家の家族や大臣たちは、豊かに装飾された衣料品や鞍、金がはめ込まれた小銃、競走馬などあらゆるぜいたく品をヨーロッパ商人から購入していた<sup>15)</sup>。

なお、宮廷による浪費はフランスの外交文書でも確認ができる。チュニス駐在フランス総領事マシュー・ド・レセップス<sup>16)</sup>による1828年1月20日付けの本国宛て報告では、「ベイは、鑄造所の建設に多額の費用をかけたが、結局、一発の砲弾も製造しないまま放棄された。あらゆる試みが同様の結果である。フサイン家の王子たちは無知な大きい子どもである。新しいものは彼らには美しく映り、その費用や使用目的を考へることなしに、好奇心を刺激するようなものはすべて欲しがるのである」<sup>17)</sup>と記されている。こうした宮廷による浪費が積み重なり、それを補うために銀貨の改鑄は実施されたのである。

ただし、ヨーロッパ商人たちがチュニジアで輸出品を見つけられなければ、銀貨を自国に持ち出し、結果的にチュニジアでは正貨不足・物価高となることが懸念されていた。知事職にあたるカイドの一人であるマフムード・ビン・バツカール・アル・ジャルーリは、同懸念を大臣フサイン・フジャに伝え、問題解決のためには宮廷の出費を減らさなければならない旨伝えたが、忠告が尊重されることはなかったという<sup>18)</sup>。

ベイは古い銀貨を回収して新しい銀貨への交換を進めたが、禁止されていたにもかかわらず、銀含有率の高い古い銀貨はヨーロッパ商人に売られていく。結局、この改鑄によってベイが得た利益はわずかなものにすぎず、最終的には外国商人がチュニジアから資本を持ち出したことでチュニジアには将来にわたって大きな損害が残る結果になったとイブン・アビ・ディアフは指摘している<sup>19)</sup>。

一方、1821年にはギリシア独立戦争が始まっていた。1826年8月、フサイン2世ベイは、オスマン帝国を支援するため、艦隊を派遣する。同艦隊は1827年10月のナヴァリノの海戦で大敗し、全滅状態となった<sup>20)</sup>。この結果、チュニ



図2：フサイン2世ベイ  
(出典) El-Mokhtar Bey, *Les Beys de Tunis (1705-1957)*, Serviced, 2002.

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

ジアの海軍力は皆無ともいえる状態に陥るのである<sup>21)</sup>。

#### 4. フランス軍のアルジェ侵攻

同時期、チュニジアの西隣りのアルジェリアでは、フランスとの関係が悪化し、緊張状態が生じていた。

1827年4月、アルジェのフサイン・デイ<sup>22)</sup>は、フランス総領事ピエール・デュバルとの間で「扇の一打」事件を起こす。同事件の内実について、イブン・アビ・ディアフは、事件時に通訳をしていた人物やアルジェの人々から聞いた話として、次のように記述している。

アルジェのユダヤ商人バクリは、フランス商人との間でアルジェの小麦輸出の取引を行っていた。フランス商人は小麦代金の支払いを繰り返す一方で、バクリに対して負債の返還を求めている。この件について臣民の保護を理由にデイが介入し、フランス商人によるバクリへの支払いを優先するという仲裁が行われた。ただし実際には、デイは裕福なユダヤ商人であるバクリからその金を取り上げようという意図があったという。しかし、他のフランス商人がバクリへの負債を要求し、デイはバクリからの金を得ることができなくなった。デイはフランス総領事デュバルと会談し、フランス商人による集金に不満を伝えるが、デュバルは債権者には要求の権利があると反論する。デイはデュバルとの話し合いを中断してフランス本国に書簡を送り、本国からの回答を要求する<sup>23)</sup>。

その後回答がないまま、時間が過ぎる。デイは再びデュバルと会談し、フランス政府はなぜ回答しないのかと問いただした。デュバルは弁明を行うが、その時のデュバルの態度がデイには侮蔑的に映ったという。デイは手にしていたハエ除けでデュバルの顔を叩き、彼をののしり、退席させたという<sup>24)</sup>。

なお、イブン・アビ・ディアフの記述は、現在知られている事件の経緯とおおむね一致している。マグレブ史家のアブン＝ナスルは「扇の一打」事件について次のように説明している。

アルジェは、18世紀末のナポレオン戦争期にフランスに対してバクリ家などユダヤ商人を通して小麦の輸出を行った。1798年時点でその代金は800万フランに及んだという。また、それとは別にバクリ家はアルジェに対して負債を抱えていたが、その返金要求に対してバクリはフランスからの小麦代金の支払いがないと返済できないと答えていた。そのためデイはフランス商人とバクリとの仲介をなし、フランス商人によるバクリへの支払いを促したが、それに対してフランス総領事デュバルは一貫して非協力的であった。デイはデュバルがバクリと共謀していると疑い、また、アルジェ東部のポーナでフランス副領事



をしていたデュバルの甥が許可を得ずにフランス商館の要塞化を進めたことから、フサイン・デイのデュバルに対する不信感が募り、1827年4月29日の会談でついに怒りが爆発して、「扇の一打」事件を起こしたという<sup>25)</sup>。

イブン・アビ・ディアフは、事件後の経緯についてもその内実を記述している。

デュバルから報告を受けたフランス政府はアルジェ沖に艦船を派遣し、デイに特使を送る。特使はデイと会談し、間違いや怒りは人間にはつきものであるとし、フランス国旗を掲げ、101発の礼砲を打つとともに、釈明のためにフランスにアルジェの高官を派遣することを提案した。デイは検討する旨述べ、会談は終わる。デイは側近を集めてフランスからの提案を協議する。側近たちは一致して、この提案は降ってわいた幸運であり、直ちに受け入れるべきだとするが、デイは彼らを臆病者だとののしる。側近たちは、われわれには戦争の準備ができていないと主張するが、デイは、かつてスペイン人たちがアルジェを攻撃したが、結局は敗走したとし<sup>26)</sup>、側近たちの意見を退ける。デイはフランスの特使に帰国を命じるが、風待ちのため出発が遅れると、フランス艦船に砲撃し、強制的に出航させた。特使は帰国し、本国に報告が行われたという<sup>27)</sup>。

アルジェによるフランス艦船への砲撃が行われた1829年8月以降、アルジェとフランスとの衝突の可能性は高まっていた。フランス政府はオスマン帝国本国に不満を伝え、不正をただすためにフランスは行動する旨通告した。また、チュニスに対しても、もし自らの安全を保ちたいならば、フランスとの友好関係を保たなければならないと通告し、もし陸上からアルジェを支援するならば、アルジェと同様にフランスとの紛争が生じると警告した。これを受けて、オスマン帝国本国は、アルジェに特使を派遣する。そして、特使タヒール・パシャを乗せた艦船が、海上封鎖中のアルジェを避け、チュニス沖に到着するのである。タヒール・パシャは、アルジェのフサイン・デイを解任することで、この問題を解決することを託されていたという<sup>28)</sup>。

イブン・アビ・ディアフは、オスマン帝国特使タヒール・パシャのチュニス来航に関するフサイン2世ベイの対応について、次のように記している。

ベイは、検疫を理由にタヒール・パシャの上陸を禁じ、側近たちと対応について協議した。大臣サキール・サヒブ・アル＝タビは、特使はパシャの称号を持っており、ベイとは同等以上であり、会談の際にベイの手にキスすることを拒むだろうと述べた。大臣ムハンマド・カヒヤは、特使が陸路でアルジェに向かう際には砂漠地帯を通るが、彼の地位に応じてエスコートをしなければならず、部隊の編成が必要なこと、また、それはアルジェを支援する計略とフランス側に誤解される可能性があることを指摘した。さらに、ベドウィン族に通じている大臣スライマン・カヒヤは、特使がトルコから来たことをアラブ人たちが知

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

れば、特に西方地域が不安定な状態にある今、衝突や混乱が生じる危険性があると言及した。海軍軍人のハスナ・アル＝ムラリは、そうした懸念はあるが、特使に敬意を示し、来客として扱って上陸を認めるべきであること、また、われわれの決定の動機を伝えて弁明することを提案した。これに対し、大臣サキール・サヒブ・アル＝タビは、ハスナ・アル＝ムラリの意見に反対し、彼を非難した。これらの意見を聞いた後、フサイン2世ベイは、タヒール・パシャに対して上陸を認めない一方、その理由を伝え、敬意を示すために数多くの贈り物を献上した。結局、チュニス上陸を拒否されたタヒール・パシャの乗る艦船は、海路でアルジェに向かったが、職務を果たせないまま、本国に帰国した<sup>29)</sup>。

1830年6月14日、フランス軍がアルジェ近郊のシディ・フルージュに上陸する。イブン・アビ・ディアフによると、アルジェのフサイン・デイはフランス軍の上陸を深刻に受け取らず、アルジェの要塞の強固さを過大評価していたという。さらに、イブン・アビ・ディアフは、アルジェの人々やベドウィン族はトルコ軍の支配にうんざりしており、彼らの忠誠や従順さには期待できない状態だったと指摘している<sup>30)</sup>。

アルジェ近郊に上陸したフランス軍は、一つ一つ要塞を占拠しながらアルジェに向かって進軍する。そしてついにアルジェのカスバを見下ろす高台の要塞を占拠し、大砲を据え付ける。フランス軍のブルモン将軍は、デイに対して、もし降伏してアルジェを明け渡すならば、人命と財産を保証するが、拒否すれば、町を破壊し尽くすまで砲撃を止めない旨、最後通牒を送る。7月4日、デイは降伏を受け入れた。その後、フサイン・デイはフランスの艦船で家族や財産とともにアレクサンドリアに渡り、そこで生涯を終えたという<sup>31)</sup>。

なお、チュニスのフサイン2世ベイは、帰国を望むチュニジア人を乗船させるため、艦船をアルジェに派遣した。7月15日、同船がチュニスに戻り、アルジェ陥落についての知らせがその時初めてチュニスに伝わったという<sup>32)</sup>。

## 5. オランへの出兵

フランス軍によるアルジェ侵攻からまもなくの1830年7月末、フランスではシャルル10世の復古王政に対する革命が勃発した。シャルル10世はイギリスに亡命し、オルレアン公ルイ・フィリップがフランス王に即位した。

アルジェに続いてオランやボーン（現アンナバ）を陥落させていたフランス軍は、政変に伴い、戦略の変更を余儀なくされた。新たに誕生した7月王政は、アルジェリア遠征については容認したものの、その後の方針は明確には示さなかった。本国の方針が定まらない中、ブルモン将軍に代わって新たに就任し

たクローゼル將軍は、チュニジアのフサイン朝と交渉し、フランスの宗主の下、アルジェリア東部の拠点コンスタンティヌと西部の拠点オランの統治をフサイン朝に委ねる計画を進めるのである<sup>33)</sup>。

コンスタンティヌスでは、アル＝ハッジ・アハマド・ベイがフランス軍に抵抗し、繰り返し攻撃を仕掛けていた。イブン・アビ・ディアフによると、チュニスのフサイン2世ベイは、イスラーム教徒の血が流れることは避けなければならないとの判断からコンスタンティヌスのウラマーや支配者たちに向けて書簡を送ったという。書簡は、このような状態が続けば、結局はフランス軍に対抗できない以上、イスラーム教徒のコミュニティは解体もしくは消滅してしまうとし、戦闘を止めてチュニスと統合すべきであると進言する内容であった。なお、この書簡はフサイン2世ベイの指示を受けてイブン・アビ・ディアフ自身が作成したという。この書簡に対し、コンスタンティヌスのアル＝ハッジ・アハマド・ベイは、外部からの助けがなくてもアルジェを取り戻すことができると回答したという。なお、イブン・アビ・ディアフは、この回答について、無作法でうぬぼれにあふれ、盲目的であったと批判している<sup>34)</sup>。

一方、フランス軍のアルジェ侵攻を受けて、チュニジア内ではベドウィン族などに動揺が広がっていた。フサイン2世ベイはクローゼル將軍の元に大臣ムスタファ・サヒブ・アル＝タビを派遣し、フランスに対して復讐心を抱くベドウィン族の動揺によってチュニジアでも動乱が起きる危険性を示した。これに対し、クローゼル將軍は、フランスへの年間規定額の支払いを条件にフサイン朝がオランを統治する計画を提示した。この計画によれば、イスラーム教徒の血が流れることを回避できるとともに、イスラーム教徒によるオランの統治によってチュニジアの動揺も収まり、さらにはオランの統治による利益がフサイン朝にもたらされるというものであった<sup>35)</sup>。

フサイン2世ベイは、この計画について弟のムスタファや大臣、高官などと協議を行う。彼らは一致して、われわれがオランを占領する必要はどこにもないとして計画に反対した。また、オランはあまりにも遠方であり、住民の風習もチュニジアのアラブ人とは大きく異なるという意見も上がった。大臣スライマン・カヒヤは、はっきりと計画は背教的であると述べて真っ向から反対した。しかし、ベイは計画に執着し、大臣アブダッラー・ムハンマド・カヒヤもベイを支持した。なお、大臣サキール・サヒブ・アル＝タビはチュニジア東部サヘル地域へ行っていて協議に参加していなかった<sup>36)</sup>。

最終的にベイは、甥のアフマド（後のアフマド・ベイ）をオランに派遣することを決定する。アフマドの父親でもあるムスタファは、自らの派遣を申し出たが、ベイがそれを否定すると、自分の息子はあなたの息子でもあると述べて

ベイの考えを受け入れた。翌日、ベイはアフマドを呼び寄せ、計画を伝える。アフマドは、ベイから発言の許可を得たうえで、現在オラン港は住民のアラブ人たちによって占拠され、彼らは自分たちの土地を守るために一丸となっており、自らの宗教や命や財産の保護のために戦う準備ができていて、そのため、オランを支配するためには完全な服従を得るまで戦わざるを得ないが、それでも支配は一時的にならざるを得ないと述べた。また、計画を実行するには少なくとも3万人のチュニジア兵やチュニジアからの恒常的な援助が必要であると述べた。ベイは発言に驚き、オランに行きたくないのかと問うと、アフマドは、もしそこに死に行けと命じられたら、それに従う準備はできていると返答する。なお、アフマドはフサイン2世ベイが甥である自分を厄介払いするためにオランに派遣するのではないかという疑いを持っていた可能性をイブン・アビ・ディアフは伝えている<sup>37)</sup>。

その後、フサイン2世ベイは、まずはハイラディーン・アガをオランに派遣する。ハイラディーン自身は計画には反対であったが、心ならずも、1831年1月19日、フランス船でオランに出発した。数日後、ベイは300人の（アルジェリア出身の傭兵部隊である）ズワブ兵と（チュニジア出身の）マフザン部隊の騎馬隊を送った。オラン到着後、ハイラディーンはオランの宮殿に閉じこもっていた。海路で輸送される商品への関税をわずかながら徴収しただけで、地元の有力者や住民たちはハイラディーンに敵対し、その殺害は適法とみなされた。かろうじて城壁と大砲で守られていたが、まるで囚人同然の状態であったとイブン・アビ・ディアフは伝えている。大臣サキール・サヒブ・アル＝タビからは、オランから資金が送られてこないとしてハイラディーンを非難する手紙が送られてきた。ついに状況が絶望的になった時、ハイラディーンは300の兵では数千の敵兵の前には無力であるとベイに報告を送り、これまで兵員や物資の援助を大臣に依頼してきたが、金の要求しか返ってこなかったと記した。フランスとの協定は実施が不可能な時には撤回することができたので、ベイはハイラディーンに撤退を命じた。1831年秋、ハイラディーンはチュニスに戻ったが、彼を非難する者は誰もいなかったという。結局、オランへの出兵は何ら成果なく、借金が残っただけであったとイブン・アビ・ディアフは記している<sup>38)</sup>。

その頃、今回のオランにおけるベイのふるまいに関し、オスマン帝国本国が自分たちに対する不服従であると同時に、イスラーム教徒への敵対行動に力を貸す行動とみなして不満を抱いているとのうわさが流れたという。ベイは、使者としてイブン・アビ・ディアフをイスタンブールに派遣することを決定する。イブン・アビ・ディアフは、オランの件が問われた際にそれを説明する書簡を託され、また、現地では質問に答えるように指示を受けた。また、同使節には、

チュニジアで新たに設立するニザーミ軍<sup>39)</sup>の認可と軍服の恵与をスルタンに求める書簡を託された使者ムスタファ・アル＝バルハワンが同行することになった。なお、このスルタンからの認可の取得は、ベイが自らの権威を高めるとともに、新たな軍の設立にチュニジアのトルコ兵たちが不満を抱いて騒乱を起こすことを懸念して行われたものであったとイブン・アビ・ディアフは伝えている。1831年5-6月、使節団は小型商船に乗り込み、出発した<sup>40)</sup>。

到着後、使節団は、海軍大臣ハリル・パシャが同席の上、大臣フスラフ・パシャと面談する。オランの件を問われると、ムスタファ・アル＝バルハワンはイブン・アビ・ディアフに回答をするように促した。イブン・アビ・ディアフは、ベイの書簡を渡し、今回の出来事に至った理由として、なによりもまずイスラーム教徒の血が流れることを避けようとしたこと、また、チュニジアが本国からは遠距離にあるため、オスマン帝国政府の許可を得ることなく、危険な状況に終止符を打つ行動しなければならなかったと説明した。その後、フスラフ・パシャは2人のウラマーを連れてきて、再び面談を行った。イブン・アビ・ディアフは説明を繰り返し、2つの悪事からどちらかを選ばなければならない場合、よりましな悪事を選ばざるを得ないと述べた。ハリル・パシャらは、今回のベイの行動は特使タヒール・パシャの受け入れを拒否した点を除けば申し分ないと判断を下した。イブン・アビ・ディアフは、もし特使の上陸を認めてアルジェまでエスコートすれば、戦争になっていたに違いないと回答した。面談は成功裏に終わり、使節団にはニザーミ軍の軍服が恵与され、1831年10-11月、チュニスに帰任した。ベイは、スルタンから贈られたニザーミ軍の軍服を宮廷の公式行事のみならず、普段から着用するようになったという<sup>41)</sup>。

## 6. オリーブ油問題

チュニジアでは、1820年代から経済危機に直面していた。先に見たとおり、宮廷を中心に浪費が進んでいたが、そうした出費を支えていたのはオリーブ油輸出から得られる収入であった。ただし、チュニジアにおけるオリーブの生産は1828年から1830年にかけて深刻な不作に陥る。すでに収穫前にヨーロッパ商人にオリーブ油を先売りしていたため、引き渡すことができなかつた分の返金をめぐってさらなる危機を招いていくのである<sup>42)</sup>。

1830年3月には、チュニス駐在フランス総領事マシュー・ド・レセップスが本国に向けて、「チュニジアの主要作物であるオリーブは完全な不作で、ベイはオリーブ油売却契約の300万フランを返金した……商業の停滞、極端な貧窮と3年に渡るすべての作物のひどい不作にもかかわらず、(チュニジア側に)

300万フランを超える輸入超過があり、それは、金や銀や正貨などの不正な輸出によって補われている。造幣局は、（チュニジア通貨の）ピアストルの品質を切り下げている。国はすでに正貨不足の状態にあり、干上がった源泉を甦らせたり、完全に底をついた鉱山から新たな鉱脈を見つけ出したりするような生産物も産業もまったく見あたらない<sup>43)</sup>と報告している。

イブン・アビ・ディアフは、オリーブ油輸出をめぐる問題について以下のようにその経緯と対応を説明している。

1819-20年、チュニジアでは東部のサヘル地域でのオリーブ生産に十分の一税を課すことを定めた。また、ベイはオリーブ油を独占的に買い取る代理人を任命し、彼らはオリーブの収穫前に生産者に支払いを行った。もし生産量が契約量に届かなければ、生産者は（不作のため比較的高い）市場価格で支払いを行わなければならない、逆に生産量が契約量を越えた場合も生産者に（豊作のため比較的低い）市場価格で追加払いが行われた。そのため、収穫のリスクは生産者が負うことになった。さらには、代理人が独占的にオリーブ油を買い取っていたため、厳密に言えば市場価格そのものが存在せず、代理人の気まぐれで買い取り価格は決定された。こうして集められたオリーブ油は、主にマルセイユ商人などのヨーロッパ商人に転売され、輸出された。こうしたオリーブ油の買い取りシステムは、サヘル地域のオリーブ油生産者に打撃を与えるとともに、ヨーロッパ商人にも活動の停滞をもたらしたという<sup>44)</sup>。

なお、このシステムは結果的にはチュニジアに損害を与えたとイブン・アビ・ディアフは指摘する。というのも、フサイン家の家族や大臣たちはオリーブ油の転売によって大きな収入を得ることになり、その結果、奢侈品の購入など浪費を繰り返すようになったからである。さらには、より多くの収入をめざして、より大量のオリーブ油を販売するようになったことで、ヨーロッパ商人へのオリーブ油販売価格が低下するとともに、生産量以上のオリーブ油が先売りされるようになった。深刻な不作が発生した1828年以降、契約引き渡し量を満たせない不足分のオリーブ油は（不作のため比較的高い）市場価格でヨーロッパ商人に返金することが求められ、フサイン朝の宮廷は大きな困惑に直面する<sup>45)</sup>。

ベイは、この危機を乗り越えるため、大臣アブ・アブダッラ・フサイン・フジャを解任し、代わりにサキール・サヒブ・アル＝タジを指名した。1829年7月、サキールは就任にあたり、収入や出費、徴税人に関して自分の要望に合わせることや可能な限り節約をすること、損失を生むような要望は控えることなどを求める。これに対し、ベイはサキールに白紙委任を与えたという。サキールは宮廷の出費にも会計収支を要請し、ベイの息子が鞍を新調しようとする、それを拒否し、「あなたの父親は外国商人に負債がある。それを清算することが

真の豪華絢爛さである」と述べたという。サキールは出費を減らすことに情熱を傾けていたとイブン・アビ・ディアフは記している<sup>46)</sup>。

ただし、1829年秋もチュニジアはヨーロッパ商人に契約量のオリーブ油を引き渡すことができなかった。オリーブ油の輸出商人のほとんどはフランス商人であったため、ベイはフランス総領事レセップスと会談する。協議の結果、両者が合意した価格でチュニジア側が不足分のオリーブ油の再購入を行うこととし、支払いの3分の1は即金で、3分の2は2回の分割で行うという内容の協定が結ばれた。サキールは資金集めに奔走し、ベイから個人資産が供出されたほか、サヘル地域のカイド（知事職）であるビン・アヤド家やジャルーリ家などからも資金が集められた。なお、サキールの前任の大臣フサイン・フジャは所有の宝石などを担保にヨーロッパ商人から高利の借金をしていたが、その出費が個人的支出であったため、サキールは返済の肩代わりを拒否したという<sup>47)</sup>。

さらに、代理人による公式のオリーブ油買い取りシステム以外にも、サヘル地域ではカイドの下でオリーブ油生産者からヨーロッパ商人への直接の販売契約も実際には行われていた。このケースにおいても、契約量を満たすオリーブ油の引き渡しができなくなっていた。フランス商人はレセップスに働きかけを行い、この問題をめぐってもレセップスとフサイン2世ベイとの間で交渉が行われることになる。レセップスは、ベイに対して、非公式な契約とはいえ、ベイの臣下であるチュニジアの民衆やベイの配下にある大臣やカイドが引き起こした問題であるとし、ベイの責任に言及した。ベイはレセップスに対処を約束する。ベイはサキールと相談し、サヘル地域の住民に配慮して経済的援助を行う一方、今後はカイドの権限を限定し、管理を強化することとした<sup>48)</sup>。

フランス軍のアルジェ占領から1か月後の1830年8月、アルジェ沖からフランス艦船がチュニスに來航する。艦船には、新たな条約をチュニジアに提示するという任務を帯びたフランスの高官が乗船していた。レセップスが交渉役となり、8月17日、チュニジアとフランスとの間で新条約が締結された。条約では、商船に対する掠奪行為の禁止や捕虜を奴隷として扱わないこと、貢納の廃止などのほか、オリーブ油を含む生産物の販売独占の禁止や政府による商業活動の禁止、ヨーロッパ商人への商業の開放などが規定された<sup>49)</sup>。

オリーブ油をめぐる問題では、条約の交渉にあたってフランス政府はレセップスに対し、オリーブ買い取りシステムの廃止と外国商人による買い付けの自由化はヨーロッパよりもチュニジアの人びとにより大きなメリットがあるとベイに感じさせるようにとの指示がなされていた<sup>50)</sup>。最終的にベイは寛大さと父権の観点からこの条項に同意を与えたと、後日、レセップスは本国に報告している<sup>51)</sup>。こうしてチュニジアでは代理人によるオリーブ油の買い取りシステム

フサイン朝チュニジアにおけるフサイン2世ベイの統治期（1824-35年）

は廃止され、外国商人にチュニジアでの商業活動の自由化が認められることになった。

## おわりに

1835年5月21日、フサイン2世ベイは病気のために息を引き取り、弟のムスタファがベイに即位した。フサイン2世ベイの統治期は、フランス軍のアルジェ侵攻とオリーブ油問題に代表されるチュニジアの経済危機というフサイン朝にとって大きな衝撃を経験した時代であった。

イブン・アビ・ディアフの記述からは、ベイの権威に基づく統治の実態が見えてくる。フサイン2世ベイは、自らのイニシアティブで人事を行い、政策方針を決定している。ただし、その決定においては、閣僚などの意見を聞くほか、オスマン帝国やフランスなどへの配慮、また、チュニス領内における騒乱の危険性なども考慮に入れた上で判断が下されていた。特に、フランス軍のアルジェ侵攻前後から、フランスからの外交的・経済的要求に従うようになっていった。その背景として、ひとつには軍事的圧力、もうひとつにはオリーブ油輸出問題などを通じた経済的圧力があつたことは容易に推測できる。

一方で、チュニジアが直面した危機に対して、軍事的にはニザーミ軍の設立を進め、経済的には銀貨の改鋳や浪費の是正、カイドの権限の制限などの改革も試みられた。それは、1840年以降のアフマド・ベイの改革につながっていく動きであるが<sup>52)</sup>、フサイン2世ベイの統治期の時点では、いずれの改革も後手に回り、成果を得るには至らずに終わる。

アルジェ問題では、フランスへの配慮からオスマン帝国の使者のチュニス上陸を認めず、またフランスの要請に基づいてオランへの出兵が行われた。オリーブ油輸出問題では、総領事レセップスとの協議の上、フランス商人への返金が行われるとともに、1830年にはフランスの要望に沿う形でチュニジアの代理人システムが廃止され、ヨーロッパ商人に商業活動を開放する内容の条約が締結された。

フサイン2世ベイの統治期は、フランス軍のアルジェ侵攻とチュニジアの経済危機を契機として、チュニジアにおけるフランスの政治的・経済的影響力が強まっていく大きな転換期であったといえよう。

## 注

1) 16世紀の北アフリカをめぐるオスマン帝国とスペイン帝国の争いについては、次を



参照。桃井治郎『海賊の世界史：古代ギリシアから大航海時代、現代ソマリアまで』中公新書、2017年、第3章。

- 2) Jamil M. Abun-Nasr, *A History of the Mahrib*, 2nd ed., Cambridge University Press, 1975, pp. 177-179.
- 3) *Ibid.*, pp. 180-181.
- 4) 17世紀及び18世紀の北アフリカとヨーロッパの外交関係については、次を参照。桃井治郎『「バルバリア海賊」の廃絶：ウィーン体制の光と影』風媒社、2015年、第1章。
- 5) 19世紀初頭の北アフリカ海賊の廃絶をめぐる外交交渉については、同書、第3章および第4章を参照。
- 6) L. Carl Brown, *The Tunisia of Ahmad Bey, 1837-1855*, Princeton University Press, 1974, pp. 66-75.
- 7) 序論の一部は、カール・ブラウンによって次のとおり英訳出版されている。Ahmad Ibn Abi Diyaf, translated by L. Carl Brown, *Consult Them in the Matter: A Nineteenth-Century Islamic Argument for Constitutional Government*, University of Arkansas Press, 2005.
- 8) André Raymond, *Chronique des rois de Tunis et du Pacte fondamental. Chapitres IV et V by 'Ibn 'Abi L-Diyāf*, IRMC-ISHMN ALIF: Tunis, 1994, pp. XI-XIII.
- 9) イブン・アビ・ディアフの『チュニジアの君主と主要協約の歴史』には多数の写本が残っており、1963-65年にはチュニジア文化庁から8巻本として出版されたが、アンドレ・レイモンは同版について厳密な史料批判がなされていない点を指摘している。*Ibid.*, p. VIII.
- 10) *Ibid.*, p. 1.
- 11) *Ibid.*, pp. 2-3.
- 12) E. Guellouz, “La Tunisie Husseinite au XVIIIe Siècle”, in E. Guellouz, A. Masmoudi & M. Smida, *Histoire de la Tunisie, les temps modernes*, Société Tunisienne de Diffusion, 1983, pp. 246-248; Jamil M. Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 186; A. M. Broadley, *Last Punic War: Tunis, Past and Present, with a Narrative of the French Conquest of the Regency*, William Blackwood & Sons, 1882, pp. 84-85.
- 13) André Raymond, *op. cit.*, p. 7.
- 14) *Ibid.*, p. 8.
- 15) *Ibid.*, pp. 4-5.
- 16) 1827年から1832年までチュニス総領事を務めたマシュー・ド・レセップスは、スエズ運河の建設で知られるフェルディナン・ド・レセップスの父親。なお、フェルディナン・ド・レセップスは、父親とともに同時期チュニスで副領事を務めていた。
- 17) E. Plantet, *Correspondance des Beys de Tunis et des consuls de France avec la cour 1577-1830*, t. III, 1899, Félix alcan, p. 646.
- 18) André Raymond, *op. cit.*, pp. 5-6.
- 19) *Ibid.*, pp. 6-7.
- 20) *Ibid.*, p. 10.

- 21) 後のアフマド1世ベイの統治期に、わずかながら艦船の建造が行われた。L. Carl Brown, *op. cit.*, pp. 299-303.
- 22) アルジェリアでは、アルジェのデイが総督職を務め、その下に東部のコンスタンティーン、中部のメデア、西部のオランにそれぞれベイが任命されていた。なお、アルジェのデイは世襲ではなく、その都度、軍人の中から選ばれていたため、チュニジアと比較するとアルジェリアの政体は不安定であった。また、チュニジアとの間で境界線をめぐって紛争が生じるなど、両者の関係は必ずしも良好ではなかった。
- 23) André Raymond, *op. cit.*, p. 18.
- 24) *Ibid.*, pp. 18-19.
- 25) Jamil M. Abun-Nasr, *op. cit.*, p. 236.
- 26) 16世紀のカール5世によるアルジェ遠征などを指すものと思われる。同遠征については、桃井治郎『海賊の世界史』、108-110頁。
- 27) André Raymond, *op. cit.*, pp. 19-20.
- 28) *Ibid.*, p. 20.
- 29) *Ibid.*, pp. 21-22.
- 30) *Ibid.*, pp. 22-23.
- 31) *Ibid.*, p. 23. フランス軍のアルジェ侵攻については、次を参照。小山田紀子「19世紀初頭の地中海と「アルジェリア危機」—トルコ政権崩壊の過程に関する一考察—」『歴史学研究』歴史学研究会、1996年、第692号、1-16, 57頁。
- 32) André Raymond, *op. cit.*, pp. 23-24.
- 33) Jamil M. Abun-Nasr, *op. cit.*, pp. 238-239.
- 34) André Raymond, *op. cit.*, pp. 34-35.
- 35) *Ibid.*, p. 35.
- 36) *Ibid.*, p. 36.
- 37) *Ibid.*, pp. 36-37.
- 38) *Ibid.*, pp. 37-38.
- 39) ニザーミ軍については、次を参照。L. Carl Brown, *op. cit.*, ch. 8.
- 40) André Raymond, *op. cit.*, pp. 38-39.
- 41) *Ibid.*, pp. 39-40.
- 42) 1820年代のチュニジアの経済危機については、次を参照。桃井治郎「19世紀初頭のチュニジア経済危機—対外貿易の変容と危機の増幅メカニズム—」『アフリカ研究』日本アフリカ学会、2005年、第67号、41-56頁。
- 43) Archives du Ministère des Affaires Etrangères (France), Correspondances Consulaires et Commerciales, Tunis, t. 48, ff. 357-359, 31/3/1830.
- 44) André Raymond, *op. cit.*, p. 26.
- 45) *Ibid.*, p. 27.
- 46) *Ibid.*, p. 28.
- 47) *Ibid.*, pp. 29-30.
- 48) *Ibid.*, pp. 30-34.
- 49) *Ibid.*, pp. 24-25.

- 50) E. Plantet, *op. cit.*, p. 702.
- 51) *Ibid.*, p. 708.
- 52) アフマド・ベイの改革については、次を参照。桃井治郎「19世紀のフサイン朝チュニジアにおける危機と改革（1）—アフマド・ベイの統治と対外関係」『清泉女子大学紀要』2022年、第69号、67-83頁。